

除不能胃癌と判明し、病状を患者に告知した。患者はその後他院へ入院、やはり切除不能胃癌と診断された。平成2年6月26日吐血し、ショック状態で当科へ搬入されたが保存的治療にて軽快し、週2回の5-FU 250mg およびレンチナン1mg ivにて、外来 follow とした。経過中、腹水濃縮濾過灌流施行、全身状態の著明な改善をみたが、平成2年12月26日永眠した。経過中、患者の精神状態は非常に安定していた。

9. 胃癌を合併した食道癌肉腫の1例

(聖隷浜松病院外科)

鈴木 啓子・中谷 雄三・小島幸次朗・
神崎 正夫・戸田 央・鳥羽山滋生・
町田 浩道・四條 隆幸・田中 信一

胃癌を合併した食道癌肉腫の1例を経験したので報告する。症例は66歳男性。嚥下困難を主訴に来院。上部消化管造影にて食道中部に境界明瞭な腫瘤陰影が認められ、胃体上部に壁不整像を認めた。内視鏡検査では食道内腔を閉塞する有茎性腫瘤が認められ、胃体上部に陥凹性病変を認めた。以上より、胃癌を合併した食道癌肉腫と診断し食道亜全摘、胃全摘術を施行した。病理組織学的所見、腫瘤の大部分は紡錘型細胞から成る肉腫様成分で占められ、腫瘤基部には中分化型扁平上皮癌が認められ、食道癌肉腫と診断した。また胃腫瘍は印環細胞癌であり、食道腫瘍と胃腫瘍の間には連続性は認められなかった。

10. 当院における同時性、異時性重複癌症例の検討

(中山記念胃腸科病院)

呉 兆礼・林 恒男・田中 精一・
太田代安律・今里 雅之・吉田 基巳・
高石 祐子・磯部さく子・佐藤 秀一・
小島原典子

昭和58年5月から平成3年11月までの7年9カ月の間に当院で行った悪性腫瘍手術症例615例のうち20例は重複癌であった。その内訳は同時性が13例、異時性が7例と約2:1の割合であった。

615例のうち胃癌が304例と最も多く重複癌もほとんどが胃癌との重複であった。胃癌の重複臓器としては大腸が5例と最も多く、次いで食道・腎・胆管胆嚢癌が各々2例ずつであった。今回そのうちでも比較的稀な食道・胃早期癌と胃・腎重複癌の2例を若干の文献的考察を加えて報告する。

11. 胆管結腸重複癌の1例

(大分市医師会立アルメイダ病院外科)

木山 智・白鳥 敏夫・進藤 廣成・

杉 洋一・松本 匡浩・大石 英人・
荒武 寿樹

今回我々は胆管結腸同時性重複癌の1症例を経験した。63歳男性、心窩部痛を主訴に来院。US、CT、ERCP、血管造影、注腸造影等にて肝門部胆管癌と下行結腸癌の重複癌と診断した。胆管癌に対しては肝左葉、尾状葉、臍頭十二指腸合併切除術(R3)を、下行結腸癌に対しては左半結腸切除術(R2)を施行した。いずれも治癒切除しえたので、若干の文献的考察を加えて報告する。

12. 膵頭部嚢胞性疾患の3例

(大分市医師会立アルメイダ病院外科)

杉 洋一・白鳥 敏夫・進藤 廣成・
松本 匡浩・大石 英人・荒武 寿樹・
木山 智

我々は最近、膵頭部に多房性嚢胞を認めた腫瘍を3例経験した。(症例1)66歳男性、肺癌手術のため入院中、膵頭部腫瘍を指摘された嚢胞腺腫。(症例2)56歳男性、胆嚢結石、総胆管結石を合併した嚢胞腺腫。(症例3)81歳男性、黄疸を主訴に入院 PTCO を施行、膵頭部癌に嚢胞腺腫を合併。3症例に対して幽門輪温存膵頭十二指腸切除術を施行した。診断、術式の検討と若干の文献的考察を加えて報告する。

13. 粘液産生膵癌の1手術例

(秩父市立病院) 冨松 裕明・中野 達也

膵癌の特殊な形態をとるものとして、粘液産生膵癌の報告例は近年増加してきているが、当院でも経験されたので若干の文献的考察とともに報告する。

患者は78歳男性で、閉塞性黄疸にて入院。内視鏡で十二指腸乳頭の腫大、開口部の開大と粘液の流出を認め、造影では膵管の嚢腫様拡大を認め、粘液産生膵癌の診断で膵全摘術を施行した。

病理では乳頭腺癌が主膵管および太い分枝中に増殖し、胆管および主膵管への浸潤を認めたが、リンパ節には転移を認めなかった。

術後、肝硬変の合併や高齢などのため、インシュリン、グルカゴンの投与など、栄養管理に難渋し2回のIVHによる栄養改善のための入院を要したが、術後1年6カ月現在外来通院中である。

14. 胆嚢 malignant fibrous histiocytoma の1例

(伊勢崎佐波医師会病院外科)

宮川 隆平・安部 龍一・
宮崎 要・河 一京
(東京女子医大第2外科) 浜野 恭一